

# フィールド風

(現場)からの

宮田守男

11月初旬、村役場に勤務した当時、大北地域で一緒に地方自治を担ったメンバーと、今回新潟県弥彦神社への旅。弥彦神社は、越後

国の文化・産業発展の祖神として「おやひこさま」の愛称で呼ばれ、年間100万人以上が訪れる神社だ。明治45年、門前からの大火でほとんど焼失した歴史を持つ。だが、関係者の再建熱意により大正5年に、現在の荘厳・壮大な社殿が再建され、今年100年目を迎えている。

平田だったが、神社に近づくと大波瀾になり、駐車場手前で下車することになった。関係者に聞くと、この時期では珍しいとほほ笑む。今回の訪問の目的は、「弥彦神社・菊まつり」だ。長年続けられ

てきた奉納切花大会が、昭和36年から新潟県菊花展覧会と発展し、現在4000鉢の菊花が出品される日本でも有数の展覧会だ。この菊まつりの特徴は、いわゆる菊人形展と異なり、1年間の丹

精に技術の粋をこめて菊花を審査することになり、観菊団体や、菊つくりの専門家らの訪問者も多い。毎年テーマを変えて作られる3万本の菊の挿し芽で全国の豊勝地を造園する「風景花壇」は評

判で、今年の課題の「弥彦山」の題は大混雑。急ぎ足で境内の会場を巡り、最後に新潟県菊花連盟の菊家内所に着く。菊つくりのベテラン案内人は、菊について尋ねていると、大勢の人が集まっ

の黄色の嵯峨菊、前に草丈の低い赤の肥後菊を植えたもので、開花期の同じ苗を植える事がポイントだ」と教えてくれる。菊の内容を更に知りたくて、会場内の説明看板を見る。大菊は、

## 文化という着眼点をもって旅する 楽しさを考えてみませんか(その1)

ついで。

「ここには無い菊は、の質問に、「弥彦づくり、この菊花大会で創出された仕立て方で、1つの鉢に古典菊3種を植え込む。うしろに草丈の高い白の伊勢菊、中央に草丈中位

昔中国から渡来した事、伊勢菊(伊勢の狂菊とも言われ、古来伊勢神宮周辺で盛んに作られた菊で、細い花弁がよれて絡み合い、狂って垂れ下がるのが特徴)、嵯峨菊(千年の昔から京の宮廷で栽培

され、現今では嵯峨野大覚寺を中心に作られ、清らかな花の姿が好まれ茶席用の花として重要されている)、肥後菊(江戸中期、武士道の盛んな頃、細川藩士の教養の一つとして熊本地域で盛んに栽培された)

など、使われた古典菊は日本原産の菊である

会場は、菊栽培技術の話で盛り上がり、中々前に進めないうほど

の大混雑

事が分かった。旅する前に、事前に準備が必要なる事を感じた。た「白」もあった。(つづく)  
(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・森上白馬村)

